

＜附属学校園コラム＞附属小学校

附属小学校が担う教育実習と教員養成

葉狩 学

1 はじめに

教育実習は、教育職員免許法第6条に規定されている教員免許を取得する学生が、一定期間教育現場での体験を通して教師として必要な知識、技能、態度、心構え等を修得するために行われるものである。本校はその主な役割として鳥取大学生に教育実習の場を提供している。そして、指導を通じて教員養成に積極的に参画し、大学教育の一翼を担っている。本年度も年間3回、教育実習生を受け入れた。1回目5月に行なった主免応用実習は、おもに3年次に主免基礎実習を終えた4年生23名を受け入れた。2回目9月に行なった主免基礎実習は、おもに初めて教育実習を行う3年生26名を受け入れた。そして、3回目11月に行なった副免実習では、他校種の教員免許に加えて小学校教員免許を取得しようとする学生を7名受け入れた。いずれも各2週間、年間計6週間の教育実習であり、毎年一定期間本校教職員は教育実習生に対して、熱心に指導に当たっている。

2 附属小学校が大切にしていること

教育実習とはいえ、児童を前に一定期間教師としての職責を果たすことになる。教育実習生にとっては、教育現場で実際に経験を積むことにより、教育の意義について理解を深め、教師としてのあり方について身をもって学ぶことになる。そのため、小学校は主免基礎実習、主免応用実習、副免実習の性格を考慮しながら、指導支援を行っている。また、大学での学びの成果（理論）を、教育実践を通じて体験的に確認し、実際の教育現場に適用させることも目的の一つであり、現職教員による指導を通じての実践的指導力の修得を重視している。そして、教育実習を通して、教育実習生が小学校教育の魅力を体感することで、小学校教育への一層の理解と教育に対する情熱を高める機会となることも教員養成の視点で大切にしている。

3 教育実習の実際

(1) リモートによる教育実習生の紹介

教育実習生は各学級に配属されその学級を中心に教育実習を行う。同じ学年内では学習や活動を通じて交流があるものの、他学年とのつながりはほとんどない。そこで、今年度はコロナ禍で活用している校内リモートを使って、ライブでの自己紹介を行った。児童にとっては、他の学年学級に配属された教育実習生がどんな先生かを知ることができ、休憩時間などの交流のきっかけを作ることができた。実習生にとっても、全校児童とつながりをもつことにより、多くの学びを得る機会をつくることにもなった。



給食時間、黙食を行っている全校児童に向けてリモートで自己紹介

(2) 学校行事の運動会に参加

主免基礎実習に参加している教育実習生は、運動会の練習と当日が実習期間に含まれる日程となった。学級において教科学習を参観実践することはもちろん大切であるが、学校行事も大切な教育活動の一つである。運動会が実施計画に基づいてどのように当日を迎えるのか、当日はどのように運営されているのかを学ぶ機会となった。また、運動会運営の役員として、一役を担ったり学年競技の補助を行ったりすることで体験的に実習を行うことができた。



運動会 5 年学年競技の補助で活躍する教育実習生

(3) ICT 機器の活用

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、社会のあり様も大きな転換期を迎えている。本年度、本校においても学びの姿の転換に対応して、GIGA スクール構想の実現に向けて取組を開始した。今後、小学校での学びの姿は一人一台のタブレット端末やコンピュータによって、大きく変化していくことになる。教育実習生が教育現場で実際に教壇に立つときは、教科・領域特有の学びの中に、効果的なタブレット端末の活用を位置付けた授業を行うことになる。そこで、教育実習中は各教科・領域の中で多様な ICT の活用を観察し、少しでも授業実践に取り入れる教育実習とした。



授業実践で、モニターに算数の問いを映し出し、学習を進める教育実習生



算数の問いに関する表を画像で提示して、授業を進める教育実習生

4 附属学校園が行う教育実習の意義

附属学校園としての使命である教育実習は、毎年行うことで教える内容と方法が明確であり、システム化されている。また、教員養成センターの教育実習担当者と本校の教育実習主任は連携をとりながら、事前事後の指導支援を密に行っている。教育実習生が学校に一人または数人の学校と違い、各学級・各学年に複数名配属されるのも附属校ならではの、学生にとっては話し合い協力し合える横のつながりの中で教育実習を進めることができる。そのため、実習担当者が手をかけ過ぎることなく、ある程度実習生の自主性に任せて主体的に実習を進めることができ、活発な教育実習が展開される。3年次に4週間分を1度にやり終える大学もあるが、

本学附属小学校の場合は、3年次と4年次それぞれ2週間ずつの2回に分けて行う形態をとっている。そのため、3年次に行った実践を踏まえて大学で学びを深め、改めて4年次に現場で理論と実践の融合を図ることができる。その時、附属小学校が配慮していることの一つに、例えば3年次の主免基礎実習で低学年を受け持った場合、4年次の主免応用実習では中高学年の配属となるようにすることで、意図的に発達段階の違う児童の指導を体験する機会を作っている。また、2年間で2学年に配属することにより、複数の指導教員による複数の視点で指導を受けることができる。



主免応用実習研究授業 6年生の様子



主免基礎実習 5年生の授業の様子

5 おわりに

教育界は、学校数、教員数、児童生徒数の減少と共に時代の要請や教育的課題が山積しているが、これからの社会を担う人材を育てるすばらしい職業分野でもある。教育実習期間、学生は児童から「先生」と呼ばれ、自覚と責任をもって教壇に立つことになる。緊張の毎日ではあるが、一人の社会人としての責任はもちろん、教員としての資質能力の重要性や様々な業務内容といった教員という仕事の難しさに直面する。しかし、それ以上に先生として慕う児童の笑顔や真剣な眼差し、素直な言動に心動かされ、教職の魅力を実感するのも教育実習の醍醐味である。何物にも代え難い教育現場での教育実習体験を通じて、教師としての適性を判断したり教職を志望していく自らの課題に向きあったりしたうえで、ぜひとも教育の世界を目指してもらいたいと切に思う。

葉狩 学(鳥取大学附属小学校副校長)